『セント・ニコラス』試論
―― こどもに求めるもの

岸　上　眞　子

親はこどもにさまざまな夢を託す。社会も時代も然り，現実を説きつつも理想を吹き込む。そして時には強いる。

1873年11月に創刊された『セント・ニコラス』*St. Nicholas* は絶大の人気を博した児童月刊誌である。その立役者であるM. M. ドッヂ　Mary Mapes Dodge (1831－1905) 初代編集長時代に絶頂期を迎え，その後出版元や編集方針が幾度も変わり，又人気も先細りしていったとはいうものの1940年頃まで続く。この『セント・ニコラス』の中でさまざまなこどもが活躍する。価値観が揺れる中，こどもにどうあってほしいか，こどもはどうあるべきか，作者の，ひいては大人の，いや，時代のさまざまな思いを担って，こどもは右往左往する。

実際，『セント・ニコラス』は "To keep pace with a fast-moving world in its all activities" をモットーの一つに挙げ，これに従い敏感に時代を映し出している。ここに登場するこども達の中にこの時代がある。

1．この時代

元来アメリカではピューリタニズムとかフロンティア・スピリットといった精神の有り様が人を動かしていた。南部におけるプランテーションの世界とかコスモポリタン的太平洋沿岸中部諸州等も侮れないが，アメリカの礎は何といってもニューイングランドにあり，ピューリタニズムである。そしてその後の大躍進はフロンティア・スピリットの賜物だ。西部拡張期のカリスマ，A. ジャクソン Andrew Jackson (1767－1845) は大人社会へすんなり入門（イニシエイション）するのではなく，返って反発し，独立独歩自ら道を切り開いていくことを理想とした時代の象徴であり，一般大衆を引っ張っていくのに大きな役割を果した。ジャクソンこそ少年達の夢であった。

アメリカに最もロマンがあった，そしてそれを追い求めることができたこの精神的には輝しい時代も南北戦争 (1861－1865) を境におおきく変っていく。勝者である東部の資本主義が

南下西進していく中，大陸横断鉄道の完成（1869）によって交通網は発達し，都会化は進み，物質的なるものの徹底がおこなわれる。西進とはもともと自由希求運動であり，フロンティアとは夢の代名詞でもあったのに，切り開かれた土地も後からやって来た資本力ある者共の支配下に置かれるようになる。物質面での大上昇と精神面での下降により，外見は華やかでピカピカでも中身は空っぽという金めっき時代 Gilded Age（1865－1890）を迎えることになる。文学はロマン主義からリアリズムへ変わるその過渡期にあり，リアリズム文学の芽が育った時代である。

このような中から生まれたのが『セント・ニコラス』であり，ジャクソンもヒーローとしての権威を失墜し，宗教一辺倒の価値判断も圧倒的信奉を得られず，近代文明の波打ち寄せる中，物質主義の世になりつつあった時代にあって，こども達は何を求められたのであろうか。

2. What is the use?

実際の価値をまず問うのは何もこの時代に限っての特徴というわけではないが，何をおいてもこれである。絶対的価値基準である。物質文明発展期に，機械化合理化が進む中，生活の場でも無駄のない便利なものを尊ぶようになっても不思議はない。実用主義になる。現実に即した効用を一番にする。擬人化された“good jack-knives”は“always seem anxious to make something useful”[1]であるからこそ“good”であり，動物も同様に

> If the zebra were as useful as he is ornamental he would be one of the most valuable members of the horse family; but, unfortunately.... [2]

となる。人間では“a good practical friend”[3]こそ最良となる。何に対しても“What is the use?”と問うことを求めている。畢竟，“use”という単語の使用頻度も極めて高く，物・者どちらに対しても最高の形容といえるほどで，その志向の強さには驚かされる。

『セント・ニコラス』自体“To prepare boys and girls for life as it is”なるモットーのもと，実用書の役目も果している。例えば“Ready for Business; or, Choosing an Occupation —— A Series of Practical Papers for Boys”[4]と名打ったシリーズ物で種々の職業紹介をしているが，手取り足取り懇切丁寧でかつ具体的な入門講座となっており，賃金の説明まで事細かにされている。仕事の雰囲気や外面を追ってあこがれを抱くのがこどもの常ながら，その苦労や報酬まで教え込もうとしている。地に足をつけて，しっかり現実を見つめることを求めている。その他広範囲な分野に渡って実際に役立つ案内書としての性格を色濃く打ち出している。

3. Money, money, money!

物質主義の根本はお金である。前述の職業紹介シリーズでもそうだが，燈台の紹介文ではその建設費用から従業員の給与まで具体的な数字入りで触れている[5]。その他お金への言及が実に多い。「こども向けというのに」と思うのは日本人的感覚なのかもしれない。特に芸術家というと至高の存在で，魂をお金で売らないといったお金とは無縁のイメージが強い。しかし連載で音楽家を扱った "From Bach to Wagner —— A Series of Brief Papers concerning the Great Musicians" [6] でも毎回お金への言及があり，その他ハープ弾きは財産獲得の為 "seized with a desire for wealth"[7] となり，名の売れない画家も財産にこだわり，最後は "making his fortune" [8] をもってめでたく終わる。つまり成功とは財産をつくることであり，何人も富にこだわり，正しき者，才ある者，努力を怠らない者すべては必ず富を授かり幸せになるのである。「名もなく美しく貧しく」は決して求められてない。

さらに投書欄で "the Hans Christian Andersen Fund" に対する寄付を呼びかけているが，お金をもらうのを期待するのは "a moral right"，もらえない状態を "this wrong" [9] とまで言い切っている。又少年が言い付けに背いて船出を敢行，遭難するが無事帰宅，家族の涙そして少年の改心といったお決まりの筋展開の話の中で，船の弁償という問題にまで触れ，少年の責任をお金で追求している[10]。お金の亡者になることを求めているのでは決してないが，成功も責任の遂行も内的なものにとどまらず，お金というものに結びついていることを，よく言えばこの世の実際を眼を見開いて見ることを説いている。無論心が大切だが，並んでお金で解決せねばならないこともあることを呈示している。

このような考え方の土台はアメリカ人の宗教観であることは明らかだが，この時代の副産物ともいえる。あまりに現実主義的で，夢がない。といってもこの時代を乗り切るにはこれ位のことは当然だったともいえる。

4. 自然児 ⟶ きちんとしたよい子

アメリカという国はそもそも旧大陸における束縛を逃れ，自由を求めてやって来た人達が建設した国で，独立戦争時には多少ナショナリズムの目芽えがあったとはいうものの，根本は自由な個々人の集合体といえよう。しかし南北戦争によって国民は一時的にせよ一つの目的に向わせられた。その結果，地方主義一辺倒をやや脱却し，ナショナリズムを育てていくことになった。『セント・ニコラス』の中でも "To foster a love of country" を謳い文句の一つとしている。独立記念日との関係で，七月号の中に愛国心を讃えるものがフィクション，ノンフィクションを問わず多くあり，例えば主人公を読者と同年代のこどもとし，独立戦争時

のこどもの勇敢な行動に焦点をあてることを通して，国を愛する心の大切さを説いている[11]。

時代が進むにつれて社会が組織体として整備され都市化されていく。そうなると社会体の中での責任が問われるようになる。一員としての義務やかくあるべしの中に封じ込めようとする力が働いてくる。野性児・異端児・革命児こそアメリカの原動力であった。彼等こそアメリカを築き上げた。しかるにこのような存在は次第に疎まれるようになる。代って，社会からはみだすことのない，協調性ある従順な人間が求められてくる。アメリカを動かしてきた進取の気性も讃えられてはいるが，組織内におさまるものに限られてくる。

この傾向は1890年のフロンティア消滅によってなお強まった。自由土地こそ新天地であり，逃げ場でもあった。そこに夢があったから，どんな辛苦も厭わなかった。しかし残された道は，組織内で生きていくことのみとなる。もはや自由を求めるがあまりほしいままの生活をおくることは許されない。社会のルールに従い，一員としての役割を果していくことこそ肝要，枠からはみ出ることなく，きちんとした生活をおくれるきちんとした人間になることが求められていく。

ジャクソンばりの生き方は立志伝中のものとしてこどもに励みを与える役目を担わされているとはいうものの，実際のところ周囲に反発できる自由な日々はつかのまのものとして扱われ，ほどなく社会の一員として目覚め，その内の人間として成長していくという筋展開が多い。組織に組み込まれてない自然児は悪，危険人物となる。体制内のきちんとしたよい子であることが一番求められている。

例えば本紹介コーナーで主人公が“the same foolish boy still”で成長がないとして攻撃されたり，“a ‘live’ boy, up to mischief in every shape and form”としてその魅力を認めつつも，“we pity Aunt Jane, and hope that, for her sake, at least, the young man will try to mend his ways”[12]と結んでいることからも分かるように，何が何でもよい子志向で，よい子の話あるいは悪い子が改心してよい子になる話のオン・パレードである。

しかしこのよい子のよさというのが曲者で，絶対的なよさではない。親から見て，大人から見て，さらに社会から見てのよさを備えたよい子になることを求めているのである。

5．冒険 ⟶ 家庭の幸福

“To give them examples of the finest types of boyhood and girlhood”なるモットーが『セント・ニコラス』にある。この“finest”も同様に大人から見てということわり書きを付けるべき代物で，大人の引いた線の枠内で，大人が求めるままに動くことをこどもに課している。その結果，こどもは安全という大義名分のもと窮屈な世界へ閉じ込められてしまう。親元を離れ，自由を満喫し，スリルを味わう危険性の高い冒険なんてとんでもないということに

なる。

冒険物語は数多く掲載されているが，冒険の楽しさが中心となっていない。危険なことを禁ずる祖父の忠告に従わず海へ出て，死ぬ寸前に助けられて家路につく話では，恐怖を強調[13]，あこがれ通り船に乗り数々の冒険をして英雄となるのだが，一切夢だったという結末を用意して，冒険を非現実の世界へ追いやる[14]，その他後悔の気持の強調，反省を充分織り込んだ説教つきの終り方にする，設定を遠い異国の地としたり歴史の靄で包むことによって身近かなものでないことの印象づけをする等，安全性の追求，危険性の排除に徹している。

"the very worst boys"[15] との評判をとっていた少年達を主人公とする話では，たとえ大胆と思えても危険を顧みず，親の命に逆らい，いたずらをしたり冒険に乗り出していく様子が実にのびやかに生き生きと描かれているのだが，思い出の形とし「今になっては……」という反省の弁を織り込ませ，

> My heart aches as I think of the anxious mothers who worried day after day ; about graceless scamps who disobeyed orders and went skylarking on the water. [16]

と親の気持を思いやることを忘れてない。さらに船が木端微塵になって遭難したところで，

> ...how lovely the far-off town looked as we gazed back at it....home never seemed so beautiful before. [17]

との思いを少年達に抱かせ，"town" や "home" の再認識をさせている。最後は救助されて無事町へ戻るのだが，お決まりの涙涙の感傷及び

> Perhaps we truant youngsters were much to blame for the night of tearful apprehension which we brought into the quiet old town. Perhaps, —— and who shall say that each one did not deserve to "catch it,"...? [18]

との弁をもって逃げている。こどもへの配慮というべきか。

本紹介コーナーでも "The adventures are possible, the escapes thrilling" としながらも

> ...his return to his duties at last is so satisfactory that we are inclined to do as others did and forgive him. [19]

と結び，“a dangerouns journey”は“the mere love of excitement”だから“no need of wasting much sympathy”[20]と決めつけて冒険を頭から否定しているのもある。だからこそマーク・トウェイン Mark Twain (1835−1910) の「トム・ソーヤの冒険」*The Adventures of Tom Sawyer* (1876) や「ハックルベリィー・フィンの冒険」*The Adventures of Huckleberry Finn* (1884) がこどもにふさわしくない書として排斥されたのである。家にきちんとおさまるか，親の眼の届く所で安全に遊ぶことが求められているのである。

安全を求め危険を排するのは冒険物語においてだけではない。新しいおもちゃとゲームの紹介欄では“the most perfectly safe”[21]ゆえにおすすめとなっている。何が何でも安全第一主義である。

この“To risk life where nothing is to be gained by it, is all stuff and nonsense. Let us row home.”[22]なる考え方はフロンティア精神と対極をなすものである。時代の変化が端的にあらわれている。いかに危険であろうと顧みず，冒険に命を賭しても未知の世界へ赴くのがフロンティアであった。家庭の暖かさとかぬるま湯的小市民生活とは当初無縁だった。それが外よりも内へ，冒険より家庭へ中心が移っていく。

さてよい子は大人が心配するような冒険など企てない。本来こども一人一人に帰属しているはずの自由も親が与えるところとなる。いたずらも親が納得ずくめのもの，何か行動をおこす時は許可を求めてからとなる。雨後母親の許可のもと外に出たこどもは“ran through, laughing aloud in his happiness”だが，何と“he was very careful not to spatter”[23]である。そこで

> ...you needn't be careful about those clothes. You may spatter as much as you like.[24]

なる母親の言葉を聞いてはじめて“The reckless way which he dashed through the water”[25]となるのである。隣家のこどもは，

> My mamma don't 'low me to play in the water....it wets my nice clothes, and 'sides, little gentlemen don't *want* to be all dirty and wet, like street boys.[26]

と言い，これまた親の言いなり，実にきちんとしたよい子である。さらに母親の“you've been in long enough”なる判断で，こどもは遊ぶのをやめ“May I come in again, Mamma?”[27]と問う。母親は“Yes, to-morrow”[28]との許可を与える。従順そのもの，大

人にとって実に都合のよい姿である。枠内でしか遊ばせないが，枠内でしか遊べないになっている。親の判断基準の中でお仕着せの遊びをするこどもは，よい子特有の美徳がないわけではない。しかし伸び伸びしたところなく，芯もない。まさに骨抜きである。このようなこども達が理想として『セント・ニコラス』誌上にちらばっている。

よく言えば親子関係が信頼の上になりたち，互いによく理解し合い，思いやる心が実に深いのである。

> Boys! I've found a boat in town you can have for a week.... if I give you leave to come and go in that boat, free from fret and orders and questions (which she knows how boys hate —— she's 'most as good as a boy herself), I shall expect you to act with great prudence.... I expect you to look out for dangers as carefully as grown men do. If I *treat* you like men, you *act* like them.... (29)

これはこども達を前にした伯母の言葉である。こどもの心をよく理解した上で自由を与えている。信頼関係を前面に出している。とはいうもののこどもは大人の敷いたレールの上を走らされているのに変わりない。

外の世界から家へ中心が移ると，冒険そのものの意味が多様化していく。外でなく家の中での冒険だって可能となる。動的冒険ではなく精神的冒険だってありうる。所栓池魚籠鳥だが，屋根裏部屋を舞台にした冒険談がある。これまた

> Have all the fun you can, but be sure not to break anything and not to take cold. (30)

という母親の許可のもとではじまっている。家の窓から見える所という至近距離での坂道すべり，これさえ冒険となる。それも母親が，

> The slope was steep but smooth; not a rock, stump, or stone on its surface; there was no danger. (31)

と確認した上で，こどもに許可した冒険である。マーク・トウェインでさえ『セント・ニコラス』に連載した「トム・ソーヤの探険」"Tom Sawyer Abroad"（1893－1894）の中で，不安定で外敵に襲われやすいいかだ（『ハックルベリィー・フィンの冒険』で使用）ではなく，あ

らゆる近代的装備が整い，何一つ不自由することのない，そして極めて安全な気球船を使っての冒険を繰り広げている。

このようにフロンティアに代表されるような危険に敢えて飛び込んでいく勇猛さは求められるどころか危倶の対象となると，家の重みが違ってくる。『セント・ニコラス』にも“To foster love of...home”なるモットーがある。小市民的であろうと，家庭の役割や家庭における幸福を考えさせる話が多い。A・リンカーン Abraham Lincoln (1809－1865) とその家族を扱った伝記物でも，リンカーンを“the best and greatest American who ever lived”[32]として偉人化し，きれいなところだけの伝記に仕立てあげているが，政治家としてよりは“the tender-hearted father”[33]“the loving father”[34]なる父親像に焦点をあて，息子との係わりを主とし，理想化して描いている。まさに“home happiness”の視点である。

フランスの女王の少女時代を扱った復讐物語の中で，

> I am sorry to be obliged to confess that the first recorded desire of this beautiful, brave, and devout young maiden...was a request for vengeance. But we must remember, girls and boys, that this is a story of half-savage days when...the desire for revenge on one's enemies was common to all. [35]

さらに，

> ...the days when passion instead of love ruled the hearts of men and women, and of boys and girls as well. [36]

と加え，その時代性について考慮することを繰り返し繰り返し説いている。復讐は倫理にかなわず，ありうべからざることであるゆえ，よい子向けの配慮は不可欠となる。最後に，

> ...after years of wise counsel and charitable works...her determination for revenge seems to be the only stain. [37]

と結ぶことを忘れてはいない。悪は悪，例外はないのである。徹底した倫理観をこどもに示し，かつこどもに求めている。

...how favored are we of this nineteenth century, in all the peace and prosperity and home happiness that surround us. (38)

この中の“peace”“prosperity”及び“home happiness”達成こそ こどもに課せられた最大の問題となった。

6．宗教 ⟶ 科学

はるか彼方に夢を求めて動くことが現実的に不可能となり，定着化の時代を迎えると，教育の場が求められていく。それまでのこどもの教育は主として周囲の大人から受け継ぐことで済んだ。又教会がその役割の一端を荷なった。しかし科学の発達により知識なるものがあふれ出すと，そうはいかなくなる。公教育制度の概念は独立戦争時からあったとはいうものの，実際にはじめて公立学校が出来たのが1830年のことで，1830年代の公立学校設置運動以降全国に普及していく。特に十九世紀後半めざましい発展を遂げる。これらの学校は教育税を財源とし，無償で非宗教的普遍的教育を目指すところに特徴がある。又科学技術の飛躍的発展という時代を反映して，客観性を重視する傾向を強くし，科学知識の伝播に力を入れる方向へ進む。

『セント・ニコラス』でも時代の流れに沿って 宗教がらみの説教臭さを押えている。お上品な伝統(genteel tradition)を踏まえてモラルを説くことは決して忘れないが，宗教を前面に出すことはまずない。時代の要求であろうが，科学関連記事の豊富さには目を見張る。特に自然科学に重点が置かれ，絵や図解入りでわかりやすく説明され，読者からの投書も数多く掲載されている。これは，こどもの世界でも精神の有り様をまず問われる宗教絶対の時代は終わりを告げ，客観主義・事実主義へ主流が移ったことを示している。“cruel cramming”(39)として詰め込み教育に対する批判がはや載っているのはおもしろい。

7．自然 ⟷ 都会

物質文明の発達とともに生活水準が向上し豊かさを享受できるようになった。一般的にこの動向に対して極めて楽観的であった。しかし懐疑とまでいかなくとも過去に対する郷愁がでてきている。蒸汽船や駅馬車に変わって機関車が時代の花形になったとはいうものの，鉄道網が広がることによって資本化の波が津津浦浦にまで押し寄せ，生活を一変させた。便利になった現実を認めつつ，古きよき時代を思う気持も強くなっていく。例えば，こどものロマンを乗せて走った“the Pony Express”も鉄道によって消え去る運命にあったが，“The

Pacific Railroad killed the pony express" [40] という表現の中に，強い郷愁と現実の機械化拒否の気持がでている。同様に蒸汽船に変わって伸してきた汽車の騒音に悩まされることのない所で生活を楽しむという話もある[41]。

田舎にも資本化の波が押し寄せていた。巨大な資本力を以てシステム化された大農園を前にして

> The farm ... becomes like a great factory or mercantile house. There must be at the head of everything a large organizing brain capable of introducing and enforcing thorough system, and of skillfully directing labor and investment, so as to secure the most money from the least outlay. A farm ... would be like a bottomless pit for money in bungling, careless hands. [42]

と述べ，

> I'm content with our own little place and modest ways .... I never should have made a great merchant in town, and I am content to be a small farmer in the country. [43]

との資本化拒否の判断を主人公にくださせているが，この問題は次第に色濃いものとして呈示されていく。

この時代は都会と田舎（あるいは自然）を対立概念としてとらえ，その狭間に立ち，その間を揺れ動き，最後にどちらかを選ぶという物語がふえているが，前者の方が分が悪い。バスを擬人化し，その一生を扱った作品では，

> ... in the city I was in danger of getting grimy with mud, battered with banging over stones, and used up with the late hours, noise and excitement of town life. [44]

となり，田園に出かけると，

> I found great refreshment ... into the country for a day of sunshine, green grass, and healthful pleasure. [45]

となる。世の中変わり，年老いてくると，"I'm so tired of the streets" [46] と言って都会に

背を向け，“It is better out here in the sun than in some poor place in the city”[47]なる田舎選択をもって結んでいる。田舎こそ安住の地となったのである。

田舎からやって来た少女にとって町は“nothing had pleased or amused her”“It was all nothing but stones, stones”“It seemed . . . like a big jail”[48]としか映らず，大層否定的である。二年前からこの“walled town”に住んでいる“the Welsh mountains”（自然の地）出身の青年は，“poorer in body and purse, and in soul”[49]となって心身共に病んでいる。生活苦の為とはいえ悪の道へ入ろうとしている。しかし鳥のさえずりを聞いて故郷を思い出し，改心する。この“accursed place”なる“a great misery”[50]の地である町を去り，農家で働くことになる。自然の中心身ともいやされ，健康をとり戻す。これまた自然が優位に立っている。

さらに“the dangers of city life”[51]や“a stifling city flat[52]の中にあった“a city greenhorn of a man”は“a city wife”や“a lot of city children”[53]を連れて“our flight to the country”[54]を図り，フロンティア張りの意志をもって田舎で農業をはじめる。新天地では都会での家庭生活とは異なり，父親を先頭に一家一丸となって働らかざるを得ない。父権社会となる。“Obey orders! I am captain”[55]“Do as I bid you”[56]なる有無を言わさない父親の言葉には，絶対服従するしかない。

> I prefer to act. The only question for you and the other neighbors to decide is —— will you act with me? [57]

> Children, we all must act like soldiers in the middle of a fight. [58]

なる父親の行動哲学はあくまで男らしい。主である。母親は夫に頼りきり，従である。自然の中での父親の思いは，

> . . . I sat on the porch resting, and watching with conscious gratitude how beautifully nature was furthering all our labor, and fulfilling our hopes. [59]

続いて“this is Eden”[60]とまで言い切っている。但し農作業は決して生易しいものではない。自然の恵みに助けられることもあれば，その脅威に脅かされることもある。自然が戦う相手となって対峙してきた時も，父親の言葉は力強い。

...We have no reason to be discouraged. (61)

Let us worry no more over that spilled milk....Work there will revive my sririts. (62)

そして結論は,

More than all, we believe that you are better and healthier at heart than you were a year ago....so my simple history ends in glad content and hope. (63)

と，自然の中での生活に凱歌をあげている。以上幾つかの例をあげたが，いずれも自然志向で終わっている。こどもに対して安全な方向づけであろう。その他田舎の子と都会の子を対比して描き，両者の葛藤が色々な形で展開する作品も多い。

こども達の自然および自然科学への関心が高いことは“Jack in the Pulpit”欄や投書欄等を見れば一目瞭然だが，闘う場あるいは闘う相手としての自然から，庭に取り入れる自然，行楽の場としての自然，さらに保護の対象としての自然へ移行する過渡期にあった為，自然の扱い方はさまざまである。

狩猟について例をあげると，大鹿狩りへ行って仕留めた後，その肉をステーキにして舌鼓を打った(64)というのがあれば，カモシカ狩りへ行って,

...I was glad, after all, that we did not make a break in the happy family〔of antelope〕. (65)

というのもある。

So many of these birds are killed every year, for the New York and other markets, that it seems as if they must gradually disappear. (66)

と気遣う一方，“But they multiply very fast”(67)と結論づけている。以上の様に作品によって随分違う。

“robin shooting”について父親が,

I know the law permits you to stoot them now, but you...should be more civilized than such a law. (68)

と諌めるが，こども達が聞き入れないので，鳥が飛んでいる時以外は撃たないとの条件付きで認め

> A true sportsman is not one who tries to kill as much game as possible, but to shoot scientifically, skillfully. There is more pleasure in giving your game a chance, and in bringing it down with a fine long shot, than in slaughtering the poor creatures like chickens in a coop. (69)

と結んでいる。この父親の考え方は『セント・ニコラス』にとって許容範囲ぎりぎりの線上にあるものだろう。何故なら『セント・ニコラス』自体で "the Bird-Defenders" (70) という組織を結成し，鳥の愛護を広く訴え，読者に加入を呼びかけていたからである。加入者は個人であれ団体であれ，同誌上に毎月名前を全部載せられる程，力を入れて取り組まれていた。狩猟で生活を支えていたフロンティアの時代における人々の意識とは隔世の感がある。

この自然擁護の方向づけは時代の流れに沿った教えとなるが，都会のもつ毒を説き自然や田舎の魅力に眼を向けるようにもっていくのは健全な方向づけとは言え，現実のこども達の夢の行方とは逆方向になっている。

8．夢の行方

フロンティアの時代には西部そのものが夢となった。その消滅によって精神的危機を迎え，楽天主義に影がさす。フロンティア最前線であった西部の開拓地は因襲の支配する最も沈滞しきった社会体となり，田舎町特有の閉鎖性をもち，偏狭で頑迷固陋，対人関係のやかましい所と化していく。逆に人口の流動の激しい都会にこそ自由があり，活気に満ちていて成功の機会も多く，都会に出るということは狭い田舎社会との絆を断ち，大きな可能性を求めて自由な大海へ出るということを意味するようになっていく。夢の方向づけが逆になったわけで，例えば S・アンダーソン Sherwood Anderson (1876－1941) 作『ワインズバーグ・オハイオ』*Winesburg, Ohio* (1919) の主人公ジョージ・ウィラードは最後に田舎から都会へ可能性を求めて旅立ち，S・フィッツジェラルド Scott Fitzgerald (1896－1940) 作『偉大なギャッツビー』*The Great Gatsby* (1925) の主人公ギャッツビーも都会文明を身につけていく中に夢実現の証をみた。

『セント・ニコラス』では

> ...he chafed and fretted greatly under the restrictions of what he called his "humdrum" country life. (71)

なる同様の田舎否定表現はあるとはいうものの，大抵は田舎志向で終わっている。“the great financier of the age”[72]にあって，両親の従事する農作業を嫌い，実業家にあこがれてこども銀行をはじめた少年は，お金をめぐる人間の醜さに触れて，最後は“prefer ‘to stick to farming’”[73]という選択をする作品があるが，ここでも都会的価値否定で結んでいる。こどもに対して安全な舵取りと言えるが，夢の方向づけとして時代の趨勢に逆らっていることを否めない。

時代がすすむにつれて“use”の重視，“money”中心はますます募っていく。自然も都会生活の中の公園や庭としての意味が強くなり，生活の為に闘う相手だったのが景色として生活の中に取り入れるものになっていく。物質文明が繁栄し，都会生活志向が強くなっていく中，T・ルーズベルト Theodore Roosebelt(1858－1919) もまたカリスマとして一般大衆を引っぱっていくのに大きな役割りを果たす。発展に対する絶対的信奉をもとにし，国民をおおいに鼓舞，遮二無二働くよう駆りたてる。しかしやがて適者生存，弱肉強食の社会となる。行使する者とされる者との隔差が広がっていく。又科学技術や機械化に対しても，信奉が相変らず中心とはいうものの，懐疑も生まれ，矛盾した気持を抱くようになる。

発展への楽観と悲観の交錯，となってくるともう『セント・ニコラス』の世界ではない。貧しき者や虐げられる者に対する慈悲博愛の心を教えても，お上品な(genteel tradition)伝統を踏まえた物語の世界の絵空事としてである。社会問題が深刻化し，リアリズムの文学が主流となっていく中，『セント・ニコラス』のような児童向け月刊誌のあり方は難しい。現実の醜悪さに触れるにしても，あまり露骨にならぬよう，児童向けの配慮が必要となってくる。といって，もともとお上品な伝統に乗っとっていたとはいえ，社会の変革が進む中，相変わらずきれいごとを並べるだけではなお悪い。ますます現実との隔りが露呈されてくるばかりである。そうなると当然のことだが，ドッヂ流で押し切ることに無理がでてくる。

実際二十世紀に入って“St. Nicholas League”なるものをもうけ，小説・詩・絵・写真そしてパズルに至るまで読者の作品の掲載に力を入れるようになる等，時代の要求や読者の要望に答える努力をしたが，部数の減少を食い止められなかった。第一次世界大戦(1914－1918)そして大恐慌 (1929－30年代) と，厳しい時代を何とか名前だけは残して生き抜き，最後は幼児向けの絵本のような形で終わる。終刊は1937年とも1940年とも1943年ともいわれ，さだかではない。

ここでもう一度振り返ってみるに，『セント・ニコラス』の実用主義，お金中心主義，きちんとしたよい子づくり，家庭第一安全主義，自然科学への信奉，そして自然擁護の方向づけ等いずれもが時代の要求と合致した。都会生活志向のみ安全第一主義の立場から，時代と逆流してまでも退けられ，健全な田舎・自然志向中心とした。以上のものが，こどもに求められたもの。これに忠実に従って育ったこどもはどうなるだろう。

Notes

(1) L. N. Chapin, "The Terrible Jack-Knife," *St. Nicholas,* XII (Sept. 1885), 820.
(2) "The Zebra," *St. Nicholas*, I (Nov. 1873), 9−10.
(3) E. P. Roe, "Driven Back to Eden," *St. Nicholas*, XII (Oct. 1885), 933.
(4) George J. Manson, "Ready for Business; or, Choosing an Occupation —— A Series of Practical Papers for Boys," *St. Nicholas*, XII (Nov. 1884)~ XIV (Oct. 1887).
(5) William H. Rideing, "Our Light-Houses and Light-Ships," *St. Nicholas*, I (Oct. 1874), 725−732.
(6) Agatha Tunis, "From Bach to Wagner —— A Series of Brief Papers concerning the Great Musicians," *St. Nicholas*, XII (Apr. 1885)~ XIII (Jan. 1886).
(7) H. Butterworth, "The Story of the Jolly Harper Man and His Good Fortune," *St. Nicholas*, I (Jan. 1874), 137.
(8) John Riverside, "An Adventure with a Critic," *St. Nicholas*, I (Dec. 1873), 64.
(9) "The Letter Box," *St. Nicholas*, I (Oct. 1874), 746.
(10) Elizabeth Stuart Phelps, "The Affair of the 'Sandpiper,'" *St. Nicholas*, I (Aug. 1874), 595−601.
(11) Charles Barnard, "Rebecca, the Drummer," *St. Nicholas*, I (Jul. 1874), 503−505.
(12) "Books for Boys and Girls," *St. Nicholas*, I (Jan. 1874), 174.
(13) Mary N. Prescott, "How Jamie Had His Own Way," *St. Nicholas*, I (Feb. 1874), 202−204.
(14) Cyrus Martin, Jr., "The Cruise of the Antioch," *St. Nicholas*, I (Dec. 1873), 58−60.
(15) Noah Brooks, "Wrecked at Home," *St. Nicholas*, I (Mar. 1874), 264.
(16) *Loc. cit.*
(17) *Ibid.*, 267.
(18) Noah Brooks, "Wrecked at Home," *St. Nicholas*, I (Apr. 1874), 353.
(19) "Books for Boys and Girls," *St. Nicholas*, I (Dec. 1873), 102.
(20) "Books for Boys and Girls," *St. Nicholas*, I (Nov. 1873), 45.
(21) "New Toys and Games for the Children," *St. Nicholas*, I (Jan. 1874), 171.
(22) Paul Fort, "The Wonderful River," *St. Nicholas*, I (Dec. 1873), 99.
(23) Oliver Thorne, "Robbie Plays in the Water," *St. Nicholas*, I (Sept. 1874), 628.
(24) *Loc. cit.*
(25) *Loc. cit.*
(26) *Ibid.*, 629.
(27) *Loc. cit.*
(28) *Loc. cit.*
(29) Elizabeth Stuart Phelps, *op. cit.*, 596.
(30) Mary Mapes Dodge, "A Garret Adventure," *St. Nicholas*, I (Jan. 1874), 129.
(31) Frank M. Gregory, "Coasting in August," *St. Nicholas*, XII (Aug. 1885), 731.
(32) Noah Brooks, "A Boy in the White House," *St. Nicholas*, X (Nov. 1882), 65.
(33) *Ibid.*, 57.
(34) *Ibid.*, 58.
(35) E. S. Brooks, "Clotilda of Burgundy," *St. Nicholas*, XII (Jul. 1885), 665.
(36) *Ibid.*, 666.

(37) *Loc. cit.*
(38) *Loc. cit.*
(39) "The Letter Box," *St. Nicholas*, I (Aug. 1874), 622.
(40) Major Traverse, "The Pony Express," *St. Nicholas*, I (Sep. 1874), 645.
(41) J. F. Herrick, "War with the Little 'Redskins'," *St. Nicholas*, XII (Oct.' 1885), 883.
(42) E. P. Roe, "Driven Back to Eden," *ST. Nicholas,* XII (Sep, 1885). 839.
(43) *Loc. cit.*
(44) Louisa M. Alcott, "The Autobiography of an Omnibus," *St. Nicholas,* I (Oct. 1874), 720.
(45) *Loc. cit.*
(46) *Ibid.*, 721.
(47) *Loc. cit.*
(48) Rebecca Harding Davis, "Chip," *St. Nicholas*, I (Oct. 1874), 690.
(49) *Ibid.*, 692.
(50) *Loc. cit.*
(51) E. P. Roe, "Driven Back to Eden," *St. Nicholas*, XII (Jul. 1885), 658.
(52) E. P. Roe, "Driven Back to Eden," *St. Nicholas*, XII (Aug. 1885), 755.
(53) *Ibid.*, 756.
(54) E. P. Roe, "Driven Back to Eden," *St. Nicholas*, XII (Oct. 1885), 938.
(55) E. P. Roe, "Driven Back to Eden," *St. Nicholas*, XII (Jul. 1885), 655.
(56) E. P. Roe, "Driven Back to Eden," *St. Nicholas*, XII (Aug. 1885), 752.
(57) *Ibid.*, 751.
(58) *Ibid.*, 754.
(59) E. P. Roe, "Driven Back to Eden," *St. Nicholas*, XII (Jul. 1885), 656.
(60) *Ibid.*, 657.
(61) E. P. Roe, "Driven Back to Eden," *St. Nicholas*, XII (Sep. 1885), 831.
(62) *Ibid.*, 832.
(63) E. P. Roe, "Driven Back to Eden," *St. Nicholas*, XII (Oct. 1885), 940.
(64) C. A. Stephens, "A Moose Hunt in the Maine Woods," *St. Nicholas*, I (Feb. 1874), 204−209.
(65) Oliver Howard, "The Antelope, or Prong-Horn," *St. Nicholas*, I (Sept. 1874), 630.
(66) M. T., "Passenger Pigeones," *St. Nicholas*, I (Nov. 1873), 15.
(67) *Loc. cit.*
(68) E. P. Roe, *op. cit.*, 934.
(69) *Ibid.*, 935.
(70) "The Letter Box," *St. Nicholas*, I (Jul. 1874), 560.
(71) John H. Gibbons and Charles Barnard, "A School Afloat," *St. Nicholas*, XII (Jul. 1885), 678.
(72) S. Swett, "A Great Financial Scheme," *St. Nicholas*, XII (Sept. 1885), 846.
(73) *Ibid.*, 851.

St. NICHOLAS:

What Children Should Be and What Children Would Be

Mamiko KISHIGAMI

What children should be is one of the eternal themes to parents, society and the times. They inspire children with ideals and dreams. They intrude their views upon children.

St. Nicholas, a monthly magazine for children, performed a leading part with great success in the late 19th century. It marked an epoch in children's literature because it never gave the first place to sermonizing.

In *St. Nicholas*, not religion but morals based on genteel tradition were preached. Utility was regarded as important, and children were asked, first of all, what was the use. Making a fortune was significant, and it was not bad to think and judge in terms of money. To be free without limit was dangerous for children. Children were forced to play and act within the limits which adults set. To be good from the viewpoint of adults was important. Safety was given the highest priority and sought in every field. Dangerous adventure was expelled from children's world. Home happiness took precedence over adventure. Natural science was emphasized. The virtues of nature and rural life were asserted. These principles kept pace with the times but to try to make children have a dream in rural life or nature from a safety-first standpoint was against the current.

The way *St. Nicholas* steered children following the above mentioned was a favorite with adults and made adults feel at rest. However, what children should be is always different from what children would be. If children would be what they should be, what would they be as adults?